

心中天網島

北新地河庄の段

娼が情けの底深き、これかや恋の大海を、かへも干されぬ蜷川、思ひ思ひの思ひ歌、心が心留むるは。

門行灯の文字が関、浮かれぞめきの仇浄瑠璃、役者物真似流行歌、二階座敷の三味線に、惹かれて立ち寄る客もあり、紋日逃れて顔隠し、仕過ごしせじと忍び風、橋の名さへも梅桜、花を揃へしその中に。

南の風呂の浴衣より、今この新地に恋衣、紀の国屋の小春とて、この十月に仇し名を、世に残せとの印かや。

今宵は誰か呼子鳥、覺束なくも行灯の影、行き交ふ娼の立ち止まり、

遊女「や、小春さんか、なんといの。気色も悪いか顔も細り、いかう寒れさんしたの。オ、ほんにこの中誰やらが話で聞けば、紙治さん故、内からたと客の

吟味に逢はんして、どこへもむさとは送らぬの。イヤ太兵衛さんに請け出され、在所とやら伊丹とやらへ行かんす筈とも聞き及ぶ、がどうでござんす」

小春「ア、コレ、伊丹々々と言ふて下さんすな。それで痛み入るはいな。いとしばなげに紙治さんと私が仲、さほどにもない事を、あの贅こきの太兵衛めが浮名を立てゝの言ひ散らし。客といふ客は皆退き果て、内からは紙治さん故ちやとモ堰く程に堰く程に、文の便りも叶はぬ様になりやした。不思議に今宵は侍客で河庄方へ送らるゝが、かう行く道でもし太兵衛めに逢はうかと氣遣ひさ。ホンニもう敵持ち同然の身持ちやはいな」

遊女「ム、そんならちやつと外さんせ。ア、あれく、一丁目からのんに髪結ふて野良らしい、伊達衆自慢と言ひそな男。慥かに太兵衛さんと見た。あれくこゝへ」

と言ふに
小春は、

小春「オ、好かん。ア、コレく、こなさんそこへ頼むぞえ。宵の内は往き来に紛れ、人知れずにわしや河庄へ行くぞえ」

遊女「オ、よかろく。こゝへ太兵衛さんが見えたらば、わしがちよぼくさ。サ、サゝゝこの間に行かしやんせ」

と、覆ひになつたるその隙に、人立ち紛れにちよこく走り、とつ河内屋へ駆け込めば。

花車「オ、これはマアく早いお出で。ホンニ、お名さへ久しう言はなんだに、ヤレく珍しい。小春さん、遙々で小春さん」

と、主の花車が勇む声、

花車「ア、コレ門へ聞こえる。高い声して小春、小春と言ふて下さんすな。表へ嫌な李踏天が来るはいな。密かに、密かに、頼みやす」

と、言ふも

洩れてや、ぬつと入り来る二人連れ。

太兵「ヤアコレ小春どん、李踏天とは良い名を付けて下

んした。まづお札から言ひませうかい。ヤアコレ善六、われも知つてゐるこの小春、やがて太兵衛が女房に持つか、また紙屋治兵衛が請け出すか、張り合ひの女郎ぢや。マア近付きになつておきや」

とのさばり寄れば、

小春「エ、聞きともない聞きともない。得知らぬ人の浮名を立て手柄にならば、精出して言はんせ、言はんせ。この小春は聞きともない」

とつひと立てば

また摺り寄り、

太兵「コゝゝ聞きともなくとも、へ、小判の響きで聞かせて見せう。がまた、貴様も余程因果者ぢやはい。天満大坂三郷に、男も多いに紙屋治兵衛、二人の子の親。女房は従弟同士、舅は伯母舅、合々に問屋の仕切りさへ追はるゝ商売。それにマア十貫目近い金出して、イヤ請け出すの、ヤ根引きのとは、そりやこれ、蟪蛄が斧でござりやすてへゝゝゝ。その様な男がやつぱり可愛うござりやすか。イヤサ、お前は治兵衛さ

んが、フン可愛うござりやすかいな。我ら女房子な
ければ舅もなし、また伯父も待たず。へ、身すがら
の太兵衛と名を取った男。色里で僭上言ふ事は、治
兵衛めには叶はねども、ハテモ金持ったばかりは太兵
衛が勝った。金の力で押したらばノウ善六、何に勝た
うも知れまいはい。今宵の客も大方治兵衛めぢやあ
る。サア貰を、貰を貰を、小春はこつちへ貰を。オ、
この身すがらが貰ふたぞ。サア花車、酒出しやいの、
酒出しやいの酒出しやいの」

花車「エ、何仰んすやら。今宵のお客はお侍衆、追つ
付けこゝへ見えませう。お前はどこぞ脇で遊んで下さ
んせ」

太兵「ヤア侍客ぢや。ム、侍なんぢやい、侍なんぢ
やい。へ、なんの刀差すか差さんか、侍も町人も客は
客ぢやはい。なんぼ差しても五本六本は差すまいし、
よう差して刀脇差たつた二本ぢやい。二本差しが怖い
かえ、二本差しが怖いかえ。二本差しが怖けりやな
あ、フン、田楽屋の門通れんぢやないかいハ、ハ、ハ、

善六「ア、まるで住吉さんの太鼓聞いてる様な音ぢやな
アハ、ハ、ハ。そしたら二の音も頼んますは二の音も」

太兵「オ、よしやく。アテン、テン、トン、トン
くくくく」

善六「ア、まるでお茶屋の段梯子上つてる様な音ぢやな
アハ、ハ、ハ。そしたら三の音も頼んますは」

太兵「オット三ぢやな、アテン、アテン、テンく
くく」

善六「ア、まるで紙屑屋の遠国ぢやがなハ、ハ、ハ。し
かしちよつと口上言ふは口上を。エヘ、ン東西東西、
このところにて語りまするは、紙屋治兵衛、紀の国屋
小春、つまらん菊浮名の蜷川。相勤めまする太夫、
竹本善六太夫。三味線さぐり沢、太兵衛さん。東西、
東西々々、チョンくくくくチョン、チョン、チ
ョン」

太兵「アベン、アベン、アベベン、ベベベン、ベンベ
ンベン、ベレベンレン、ベレベンレン、ベンレンベン
レン、ベベベベベンベン、ベレベンベン、ベレベンベ

イヤコレ花車。この頃仲衆仲間の流行文句、ア、コ、
小春もよう聞きや。やあこれ善六、そこへマわれ覚え
た通りやつて見い」

善六「オット承知の助ぢや。やる、ゆる、やる、が素で
はちつと間が抜けてやりにくいな。ア、太兵衛さん。
おまはん、ずるてんあしろうてんか」

太兵「エ、ずるてん。オ、よしやく、幸ひこゝに
箒がある。これでやつてやらう」

善六「エ、箒、ハ、ハ、ハ。え、三味線ぢやな。アどれ
くちよつと拝見を致そう。ヤア、棕櫚胸に竹の丸棹
とけつかるはいハ、ハ、ハ」

太兵「サ、ハ、ハ、皆に聞かすのぢや。精一杯張り込んでし
つかりやつてくれ」

善六「ムウ、そんなら、ちよつと調子聞かしてんか」

太兵「オ、オットこんでるこんでる」

善六「マ、一の音聞かしてんか一の音を」

太兵「よし、そりや一の音ぢやぞ。ドン、ドン
くくくく」

善六「ア、まるで住吉さんの太鼓聞いてる様な音ぢやな
アハ、ハ、ハ。そしたら二の音も頼んますは二の音も」

太兵「オ、よしやく。アテン、テン、トン、トン
くくくく」

善六「ア、まるでお茶屋の段梯子上つてる様な音ぢやな
アハ、ハ、ハ。そしたら三の音も頼んますは」

太兵「オット三ぢやな、アテン、アテン、テンく
くく」

善六「ア、まるで紙屑屋の遠国ぢやがなハ、ハ、ハ。し
かしちよつと口上言ふは口上を。エヘ、ン東西東西、
このところにて語りまするは、紙屋治兵衛、紀の国屋
小春、つまらん菊浮名の蜷川。相勤めまする太夫、
竹本善六太夫。三味線さぐり沢、太兵衛さん。東西、
東西々々、チョンくくくくチョン、チョン、チ
ョン」

太兵「アベン、アベン、アベベン、ベベベン、ベンベ
ンベン、ベレベンレン、ベレベンレン、ベンレンベン
レン、ベベベベベンベン、ベレベンベン、ベレベンベ

と、悪口雑言
堪ゆる小春、
なんとよい文句であらうかの」

門にも忍ぶ侍客、物をも言はず内へ入り、太兵衛が胸倉捻ぢ上ぐれば、

太兵衛「アイタ、アイタく、こりやなんとしをる」

孫右「ア、イヤ、なんとも致さぬ。この大小が目に掛からねば明き盲目も同然。許し難い奴なれども、所柄故許してくれる。とつと失せう」

と突き飛ばされて

へらず口、

太兵衛「エ、忌々しい忌々しい忌々しいはい。イヤコレ善

六、これから一遍ぞめいて来たら、どこぞでは、ナ

ア、ソレ、今の紙屑めに逢はうも知れまい。エ、うぢ

くせずと、サア来い」

と、身振りばかりは男を磨く、町一杯にはだかつて、打ち連れてこそ帰りける。

所柄とて馬鹿者に、構はず堪へる武士の客、紙屋、紙

屋と善し悪しの、噂

小春が身に堪へ、思ひ頼れうつとりと、無挨拶なる折

節に。

内より走つて紀の国屋の、杉が気疎い顔付きにて、

杉「只今小春さん送つて参じた折、お客さんまだ見えず。なぜマアとつくり見て来んと、ひどう呵られま

す。慮外ながらちよつと」

と差し覗き、

杉「オ、そうでない、そうでない、氣遣ひなし。後詰めてしつぽりと。小春さん、滴る樽の生醬油。花車さんさらば、後に青菜の浸し物」

と、口合ひたらだら立ち帰る。

至極堅手の侍、大きに不興し、

孫右「こりやなんぢや。人の顔を目利きするは、身を茶入れ茶碗にするか。廻られには来申さぬ。この方の屋敷は出入り堅く、一夜の他出も留守居へ断り帳に付け、むつかしき掟なれども、お名を聞いて恋ひ慕ふたお女郎。なんでも一生の思ひ出、お情けに預からうと存じたに、いつかなにつこりと笑顔も見せず、一言の挨拶もなく、懷で錢読む様に、てさて俯いてばかり。イヤナニ、首筋が痛みは致さぬか。これ小春殿、

され」

小春「ム、ホンニそんなら問ひたい事があるはいな。自害すると首括るは、定めしこの咽を切る方が、たんと痛いでござんせうな」

孫右「痛むか痛まぬか切つてはみず。大方な事問はつしやれ。小氣味の悪い女郎ぢや」

とさすがの武士も、うてぬ顔。

花車「これ小春さん、初対面からあんまりな御挨拶。ちと氣を変へ、奥で酒に致しませう」

孫右「如何様、酒はよくござらう。ヤナニ小春殿。お来やれ、お来やれ」

花車「オ、堅。サア小春さん、お出でいな。ソレ奥へお銚子持つておぢや」

と高い調子は合はねども、

引つ立てられて是非なくも、打ち連れ

なんの返答も、涙ほろりの顔振り上げ。
小春「アノお侍さん、同じ死ぬる道にも、十夜の内に死んだ者は仏になると言ひますが、定かいな」
孫右「それを身が知る事か。そりや旦那坊主にお問ひな

天満に、年経る千早振る、神にはあらぬ紙様と世の鰐口に乗るばかり、小春に深く大幣の、腐り合ふたる御

注連縄、今は結ぶの神無月、

堰かれて逢はれぬ身と成り果て、哀れ逢瀬の首尾あらば、それを二人が最期日と、名残の文の言ひ交はし、毎夜々々の死に覚悟、魂抜けてとぼくうかく、身を焦がす。

『煮売り屋で小春が沙汰、侍客で河庄方』と耳に入るより、

治兵「サア今宵」

と覗く格子の奥の間に客は頭巾の、頤の、動くばかりに声聞こえず、

治兵「可愛いや小春が灯火に背けた顔の、アノ瘦せた事はいの。心の内は皆俺が事、こゝにゐると吹き込ん で、連れて飛ぶなら梅田か北野。エ、知らせたい、呼びたい」

と、心で招く気は先へ、身は空蟬の抜け殻の、格子に抱き付き焦り泣く。

奥には客が大欠伸、

孫右「イヤモ、思ひのある女郎衆のお伽でとんと気が

残らず打つ明きやれ。サ、どうぢや、どうぢや」

と囁けば、

手を合はせ。

小春「ア、忝い、有難い。馴染み誼もない私、御誓言での情けのお詞、涙が零れて嬉しうござんす。

ほんに色外に踊るゝとお前様の御推量の通り、紙治さんと死ぬる約束。親方に堰かれて逢瀬も絶え、差し合ひあつて今急に請け出す事叶はず、南の元の親方とこゝとにまだ五年ある年の内、人手に取られては私は元より、主はなほ一分立たず。『いつそ死んでくれぬか』

『ア、死にましよ』と引くに引かれぬ義理詰め に、ふつと言ひ交はし、首尾を見合はせ合図を定め、

『抜けて出よう』『抜けて出よ』と、いつ何時を最期とも、その日送りの敢ない命。私一人を頼みのかゝさん、死んだ後では袖乞ひ非人の飢え死にもなされうかと、これのみ悲しさ。私とても命は一つ、水臭い女子と思し召すのも恥ずかしながら。その恥を捨てゝも死にともないが第一、死なずに事の済む様にどうぞお前

滅入る。ア、門も静かな。端の間へ出て、行灯でも見て気を晴らそう。サ、ござれ」

と、連れ立ち出づれば。

『南無三宝、見付けられじ』と身を忍び、隠れて聞くと

内には知らず、

孫右「ノウ小春殿、宵からの素振り、詞の端に気を付くれば、花者が話の、ア、紙治とやらと心中する心と見た。イヤサ、違ふまじ。死神の憑いた耳へは異見も道理も入るまじとは思へども、さりとて愚痴の至り。先の男の無分別は恨まず、一家一門皆そなたを恨み憎しみ、万人に死に顔曝す身の恥。親はない、かも知らねども、もしあらば不孝の罰、仏は愚か地獄へも、コレ、マ暖かに二人連れでは落ちられぬ、落ちられぬ。痛はしとも笑止とも、一見ながら武士の役、見殺しになり難し。コレ、定めて金づく、五両十両は用に立て、ても助けたし。なんと死ぬる氣に違ひはあるまい。神八幡侍、冥利、他言せまじ。小春、心底

を頼みます」

と、語れば

頷き思案顔、

外には『ハッ』と聞いて驚き、思ひがけなき男氣、木から落ちたる如くにて、氣も堰き狂ひ、

治兵「エ、さては皆嘘か。二年といふもの化かされた。根性腐りしアノどゝど狐。踏ん込んで一討ち、か面恥かゝせて腹癒よか」

と、齒切りぎりく口惜し涙、

内にも小春が託ち泣き、

小春「コレ申し、卑怯な頼み事ながら、お侍様のお情けに、今年中来春、二三月の頃までも、私に逢ふて下さんして、かの男の来る度毎に、邪魔になつて期を延ばし、期を延ばせば自から手も切れて、先も殺さず、私も命を助かる道理。なんの因果に死ぬる契約した事ぞと、思へば悔しうござんす」

と、口と心は裏表、絞る袂は雨露の、膝に凭れて泣きゐたる。

孫右 「ム、聞き届けたそなたの願ひ。コレ風も来る、人や見る」

と格子の障子、ばたくと、立ち聞く治兵衛が氣も狂乱、

治兵 「エ、さすが売り物安物め。土性骨見違へし、エ、口惜しや。斬らうかつ、突かうか、どう」

障子に映る二人の横顔、

孫右 「エ、喰らはせたい、張りたい。何抜かすやら領き合ひ、拝む囁く吠える様。胸を押さへ擦つても、堪へられぬ堪忍ならぬ」

と、心も急ぎに閑の孫六一尺七寸抜き放し、格子の狭間より小春が脇腹、『こゝぞ』と見極め、『グツ』と突くに座は遠く、

孫右 「これは」

とばかり怪我もなく、すかさず侍飛び掛かり、両手を掴んで『グツ』と引き入れ、刀の下げ緒手ばしかく格子の柱に、がんじがらみに括る内。

立ち帰るこの家の亭主、

亭主 「ヤア、これは」とばかり驚けば

孫右 「ア、苦しくない、苦しくない。障子越しに拔身をつ突つ込む暴れ者。腕を格子に括り置いたれば、氣遣ひな事はない。ア、そなた衆は、小春を連れて奥へ行きやれ。身共はアノ狼狽え者、何故斯様の狼藉を致すぞ、詮議する。サア、早く奥へ行きやれ」

亭主 「イエ、お前ばかりこゝに置きましては危なうござります」

孫右 「イヤサ、コリヤ、人立ちあれば所の騒ぎ。大勢が立ち会ひ口論に及べば、武士の立たぬ様になるまいもの、でもない。と言ふも遊所故、身も忍びの遊興。ア、よい、身共ばかりこゝにゐて氣遣ひなら、一緒に奥へ往かう。小春、おぢや。往て寝やう」

小春 「アイ」

『アイ』とは言へど見知りある脇差の、突かれぬ胸に『ハツ』と貫き、

小春 「治兵衛さん」

孫右 「何がなんと」

小春 「サア、慈悲といふ事がなければ、人は難儀をするげな。あんまり酒を過して、色里にはある習ひ。沙汰なしに往なしてやらんしたら、大、河庄さん、わしや良さそうに思ひます。いつその縄解いて」

孫右 「ア、コリヤ、その縄解くな、その縄解くな。括り付けしは子細あり。身次第にして皆奥へ」

小春 「それでもお前」

孫右 「ハテ、構はずと小春、おぢやいの」

と打ち連れ立つて奥の間の、影は見ゆれど括られて、格子手枷に藻掻けば締め、身は煩惱に繋がる、犬に劣つた生き恥を、覚悟極めし、『ハ、ア』血の涙、絞り泣くこそ不憫なれ。

騒ぎ戻りの身すがら太兵衛、善六伴ひ立ち帰り。

太兵 「ヤイ、コリヤヤイコリヤ、格子覗いてけつかるのはどいつぢやい、どいつぢやい。頬冠りしやがつて嫌味な餓鬼なあ。コゝ、頬冠り取れや、頬被り取れ

いやい、エ、取りやがれ。ヤア治兵衛か、われに逢ひとうて逢ひとうて、宵から一遍尋ねたはい。サア、サア、ア、二十両の金戻せ、二十両の金戻せ」

治兵 「ム、二十両の金とは」

太兵 「ヤア、惚けな惚けな惚けなやい。慥かな証拠」と懐の、紙入れより証文を取り出し、

太兵 「こりや、これを見いやい。エ、『一つ、金子二十両也。右は今日入用に付き難儀致し候処、御取替え下され候段、御慈悲の程忘れ申さず、有難く存じ奉り候。何時なりともこの手形を以て、屹度返弁申すべく候』後はお定まりぢやい。『江戸屋太兵衛殿、紙屋治兵衛、判』こりやこれ、われが直筆ぢやぞよ。これでも覚えがないかい」

治兵 「サアそれはアノ、この間石町の御出家に」

太兵 「ヤア何処へ抜け、抜け、とそうは抜けさせぬ。こりや、証文が物言ふはいやい証文が。いちぢむ抜かしや代官所、ナア善六」

善六 「オゝそうぢや」

太兵 「エ、イ失せあがれ」

治兵 「アイタ、アイタ、ア痛い」

太兵 「何ぢや、逢ひたい。ハ、ハ、ハ逢ひたくば逢はしてやろ、サ、来い」

治兵 「アイタ、ハ、ハ、痛い、痛い」

太兵 「エ、痛い、痛いとは抜かしを。痛いとはマどうしたんぢやろな、ハ、ハ、ハ、善六、ちよつと見いちよつと見い、治兵衛めが縛り付けられてけつかるはいハ、ハ、ハ、ハ」

善六 「エ、何処にいな、何処にいな、何処にいな。ほんになアハ、ハ、ハ、けつたいなアアハ、ハ、ハ、ハ、エ、ハ、ハ、ハ、ウアハ、ハ、ハ、ハ。こりやマ一体どうしたんぢやろな」

太兵 「サア、どうしたんぢやろな。ムウ聞こえた、さては盗みひろいだな。大騙りめ、強盗め、生き摘摸め」

と、蹴飛ばし蹴散らし張り廻し、

善六 「こりや、紙屋治兵衛が盗みして縛られた」

孫右衛門、すかさず投げ出す二十両、太兵衛が顔に打ち付ける、

太兵 「アイタ、アイタ」

孫右 「治兵衛が借つた二十両」

太兵 「エ、」

孫右 「こりや、後で小言を言はぬ様、一両々々改めて、受け取りをらう」

太兵 「ハイ」

孫右 「申し分はないか」

太兵 「イヤモ、金受け取れば言ひ分は、ござりやせんで、ござりやせんでござりやす」

孫右 「言ひ分なくば、こりやかう」

と、太兵衛が襟髪引つ掴む

『これは』と立ち寄る善六を、

沈んで投げ付け

また起き上る太兵衛をば、蹴飛ばし蹴飛ばし、投げ散らせば。

はうく起きて、睨め廻し、

と、呼ばはり喚けば

行き交ふ人、辺り近所も駆け集まる、

内より侍飛んで出で善六を突き飛ばし、太兵衛が腕捻ち上ぐれば、

太兵 「アイタ、ハ、痛い痛い、こりやなんとする」

孫右 「イ、ヤ、なんとも致さぬ。この治兵衛には子細あつて某が縛り置く。うぬらが土足に掛け盗賊との狼藉。ム、おのれ最前これへ参る砌、無礼を働く泥棒めな。サア、治兵衛が何盗んだ、騙りとは何を騙つた。サそれ抜かせ」

善六 「ア、これくお侍、お侍、証拠のない事言ふかいの証拠のない事。コレこの証文が慥かな証拠。

コ、ハ、ハ、これ見やしやれい、ヘンなんぢやい、けつたくその悪い。それ程恩を見せた二十両、忝いと札は抜かさず、イヤ坊主ぢやの御出家のと間に合ひを抜かす故、騙りと言ふたが誤りかい。へ、ちつとそうもあるまいかい。ドレ、その一札」

と、取りに掛かるを

太兵 「ヤイ、おのれら。よう見物してどつかしたな。一々に面見覺えた。返報する、覚えてをれ」

と、へらず口にて逃げ出だす、

立ち寄る人々どつと笑ひ、

人々 「ハ、ハ、ハ、どつかれてさへあの頭、捕まへて締めてこませ」

人々 「ア、ソレ、そつちへ逃げをつた」

人々 「三人そつちへ廻れ、橋から投げて水喰らはせ」

人々 「遣るなく、遣るなく」

『遣るな、遣るな』と追つ駆け行く。

人立ち透けば侍、立ち寄つて縛り目解き、頭巾を取り捨て、

孫右 「こりや、この面を見よ」

治兵 「オ、兄者人」

と逃げんとすれば

孫右衛門引き留め、

孫右 「こりや、動きをるまいうぬ。言ふ事がある、失

せう」

と引立て内に、引き据ゆれば。

治兵「兄者人、兄者人、兄者人、面目なや」

とどうど座し、畳にひれ伏し泣きあたる。

小春「さては兄御さんかいの」

と走り出づる小春が胸倉

取つて引き据え、

治兵「ヤイ、畜生め、狐め。太兵衛より先にうぬを」

と足を上ぐれば

孫右衛門、

孫右「ヤイくこりやくくく、その戯けから事起くるはい。こりや、人を誑すは遊女の習ひ、己が目には今見えたか。この孫右衛門はたつた今、一見にて逢ふた女郎の心底を見抜いてゐるはい。小春を蹴る脛で、狼狽えたその己が根性をなぜ蹴らぬ。チエ、是非もなや。弟とはいひながら、三十に追つ掛かり、勘太郎お末といふ六つと四つの子の親。六間口の家を持ち、身代潰るゝ弁えなく、兄の異見を受ける事

笑しいやら、余りの事で、エ、胸が痛い」

と齒軋みし、泣き顔隠す洪面に

小春は始終噫せ返り、我が身の上は得も言はず、兄の異見と母親の心遣ひを思ひ遣り、『皆御道理』とばかりにて、詞も涙に暮れにけり。

治兵衛涙を押し拭ひ、

治兵「ア、誤つた、誤つた、誤りました兄者人。三年前よりあの古狸に魅入れられ、親子一門妻子まで袖になし、身代の手縛れも小春といふ家尻切に誑され、ア、後悔千万。モウ、モ、ふつゝり心残らねば、足向けもするまじ。ヤイ、狸め、狐め、家尻切め、貧乏神の親玉め。思ひ切つたといふ証拠これ見よ」

と、肌に掛けたる守り二つ、

治兵「月頭に一枚づゝ取り交はしたる起請、合はせて二十九枚、戻せば恋も情けもない。こりや、受け取れ」

と、はたと打ち付け、

治兵「申し兄者人、あいつが方の我らが起請、数改め

か。舅は叔母、姑は叔母者人、親同然。女房

おさんは我がためにも従妹。結び合ひ結び合ひ、重々の縁者、親子中。一家一門の参会にも、己が曾根崎通ひの悔やみより外余の事は、なんにもないはい。ア、いといは叔母者人、連れ合ひ五左衛門殿は、にべもない昔人。かゝの甥御に倒され、娘を捨てたおさんを取り返し、天満中に恥かゝせんとのお腹立ち。叔母者の氣扱ひ、敵になり味方になり、病ひになる程心を苦しめ、己が恥を包まるゝ、エ、恩知らずめ。この罰たつた一つでも行く先に角が立つ、かくては家も立つまじ。小春が心底見届け、その上の一思案。叔母の心も休めたく、この亭主に工面し、己が病ひの根元見届くるはい。女房子にも見返しは尤も。心中よしの女郎、ア、お手柄、お手柄。ア、結構な弟を持ち、人にも知られし粉屋の孫右衛門。祭りの練衆か氣違ひか、つひに差さぬ大小ぼつ込み、蔵屋敷の役人と歌舞伎役者の真似をして、馬鹿を尽くしたこの刀、俺や、俺や捨て所がないはいや。小腹が立つやら、ハ、可

て受け取つて、お前の方で、火に焼べて下さりませ」

孫右「なんと、すりやふつゝりと思ひ切つたか」

治兵「ハイ」

孫右「微塵も心は、残らぬな」

治兵「ハイ」

孫右「でかした、男ぢや、男ぢや。人中で面恥かゝせた孫右衛門、血を分けた兄ぢやと思へばこそよう思ひ切つた、嬉しいぞよ、嬉しいぞよ。ナニ、小春どん、こちの治兵衛は男でござる。さつぱりと思ひ切りました。今までは小沢山によう書いて遣つて下さつた、この起請返します。ガまた、治兵衛が方から何やら書いて遣つた物があるげな、それをこつちへ返して下さ。ハテ、今になつて何のうぢく。サ早う、これか、これか」

と懷へ手を差し込んで守り袋、引き出す一通、

孫右「ハテ、惜しうもないこの紙屑、残らずお返しなされ」

と、言ひつゝ読む文見てびつくり、

孫右
『小春様参る、紙屋内』

小春 「ア、コレ、そりや見せられぬ大事の文」

と取り付く

手を取り孫右衛門、

孫右「ム、すりやこなさん、この状の客へ義理立て」

治兵 「コレ兄者人、何処どこの客から来た状ぢや。ちよつと見せて下さりませ、ちよつと見せて下さりませ」

孫右「ハテさて、何処の客から状が来うと、思ひ切つた女郎の事、我が身の構ふ事はない。ずつとそつちへ退いてゐや、ずつとそつちへ退いてゐや、ハテ退いてゐやと言ふに。ナニ小春どん、最前は侍さむらい冥利みょうり。今は粉屋の孫右衛門、商ひ冥利。女房子限つて話はせぬ。勤めの中にもそれ程まで、ヤサ、真実のないは女郎の常ぢやはい。最前の水臭い詞は、かういう状が来であるから、これちやもの道理ぢや、道理ぢや。それに、心中して死なうとはいかい阿呆ではあるはい。思ひ廻せば廻す程、をかしいやら、不憫なやら、あんま

孫右「エ、行きやいの」

と言ふにしをく立ち出づる。

治眞
「兄者人、どうもこゝがたまりませぬ。今生こんじょうの思

ひ出にたつた一つあいつが面つらを」

と、走り寄れば

孫右「ア、こりや、なんする」

治兵
「イヤ、なんもしや致しません。ちよつと言ふだ

けでござります」

孫右「そんなら、えゝか」

治兵「ハイ」

孫右「えゝなあ」

治兵「ハイ」

孫右
「言ふても言はいでもの事」

治兵「ヤイ赤狸め。おのれ故に面恥かき、足掛け三年といふもの、恋し床しい愛し可愛も今日といふ今日、愛想が尽きたはい。たつたこの足一本の暇乞ひ」

と、
額^{ひたいぎわ}際はたと蹴^けて、

治兵
「ワツ」

りで涙が零れるハ、ハ、ハ、ハ、ハ。

「アハ、ハ、ハ」

と、笑ひに紛らす眞実は、口に言はれぬ心の礼。

小春「孫右衛門さん、必ずその文、外へ見せて下さりますなえ」

孫右「起請と共に火に入れる。コレ、誓言せいごんに違ひはないの」

小春「ハア、忝かたじけない。それで私が立ちます」

と、また伏し沈めば

眞「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。なんの己が立つの立
たぬのとは人がまししい。もうかうなるからは片時かときも
面つらが見たうない。サア兄者人、帰りませう帰りませ
う、どりや、帰りませうかい」

孫右「如何様。最前からの様子、さぞ腹が立たう。サアそんなら同道しませう。先へ行きや」

治兵「ハイ」

孫右
「先へ行きや」

「ムハイ」

と泣き出す男氣を、

思ひ遣る程堪へ兼ねて、

小春 「モウこりやどうも、いつそ心を打ち明けて」

孫右「ア、これ、これく、蹴られうが叩かれうが、

そこをちつと辛抱せずば、この状の客へ義理が立つまい、立つまいがのコレ、小春殿」

と、孫右衛門に制せられ

小春「ハア、」

『ハツ』とばかりに泣き別れ、帰る姿も痛々しく、後を見送り声を上げ、嘆く小春も酷らしき、不心中ふしんじゅうか心中むごか、

道、誠の心は女房の、その一筆ひとふでの奥深き、誰たが文ふみも見ぬ恋の

別れてこそは、立ち帰る

天満紙屋内の段

福徳に、天満つ神の名を直ぐに、天神橋と行き通ふ所も神の御前町、営む業も紙見世に紙屋治兵衛と名を付けて、千早振る程買ひに来る、紙は正直商売は所柄なり老舗なり。

夫が炬燵に転た寝を枕屏風で風防ぐ、外は十夜の人通り、見世と内とを一締め、女房おさんの心配り、

さん「日は短し夕飯時。市の側まで使ひに往て、玉は何をしてゐる事ぞ。この三五郎めが戻らぬ事、風が冷たい二人の子供が寒からう。お末が乳の飲みたい時分も知らぬ、阿呆には何がなる、辛気な奴ぢや」

と独り言、

勘太「かゝさん、一人戻つた」

と、走り帰る兄息子、

さん「才、勘太郎戻りやつたか。お末や三五郎はなんとした」

と同じく炬燵に添乳して、

さん「これ玉、その阿呆め、覚える程喰らはしや、喰らはしや」

と言へば

三五郎頭振り振り、

三五「イヤく、たつた今お宮で蜜柑を二つづゝ喰らはせ、わしも五つ喰らうた」

と、阿呆のくせに軽口立て、苦笑ひするばかりなり。

玉「ヤ、阿呆にかゝつて忘りよとした。申し申しおさんさん、西の方から粉屋の孫右衛門様と叔母御様連れ立つてお出でなされます」

さん「これはく。そんなら治兵衛殿起こそ。ノウ旦那殿、起きさしやんせ。かゝさんと伯父さんが連れ立つてゐるげな。この短い日に商人が、昼中に寝た振りを見せては、また機嫌が悪からう」

治兵「おつとまかせ」

とむつくと起き、算盤片手に帳引き寄せ、
治兵「二一天作の五、九進が三進、六進が二進、七八

勘太「宮に遊んで乳飲みたいと、お末のたんと泣きやりました」

さん「そうこそく、こりや手も足も釘になつた。とゝさんの寝てゐる炬燵へあたたつて暖まりや。この阿呆めどうせう」

と、待ち兼ね見世に駆け出づれば。

三五郎只一人、のらくとして立ち帰る、

さん「こりや戯け、お末は何処に置いて来た」

三五「ア、ほんに、何処でやらで落としてのけた。誰ぞ拾たかしらんまで。何処ぞ尋ねて来ませうか」

さん「おのれマアく大事の子を。怪我でもあつたら打ち殺す」

と、喚く所へ

下女の玉、お末を背中に、

玉「才、いとしや、辻で泣いてござんした。三五郎、守りするなら碌にしや」

と喚き帰れば、

三五「才、可愛や可愛や、乳飲みたからうの」

五十六

になる、叔母打ち連れて孫右衛門、内に這入れば。

治兵「ヤ、兄者人、叔母様。これはようこそくまづこれへ。私は只今急な算用致しかる。四九三十六、三六が一、八分で二分の、勘太郎よ、お末よ。婆様伯父様御出でぢや、煙草盆持つておぢや。一三が三、それおさん、お茶上げましや」

と口早なり。

母「いやく、茶も煙草も飲みには来ぬ。コレおさん、如何に若いとて二人の子の親、結構なばかり見目ではない。男の性の悪いは皆女房の油断から。身代破り女夫別れる時は、男ばかりの恥ぢやない。ちと目を明いて、氣に張りを持ちやいの」

と言へば、

孫右「叔母様、愚かな事。この兄をさへ騙す不覚悟者。女房の異見など暖かに。ヤイ治兵衛、この孫右衛門をぬくくと騙し、起請まで返して見せ、十日も立たぬに何ぢや請け出す。エ、うぬはなあ。小春が

借錢の算用か、措きをれ」

と算盤追つ取り、庭へぐはらりと投げ捨てたり、

治兵「これは近頃迷惑千万。先度より後、今橋の間屋へ二度、天神様へ一度ならでは敷居より外出ぬ私。請け出す事はさて措き、思ひ出しも出すにこそ」

母「言やんな、言やんな。タベ十夜の念仏に講中の物語。曾根崎の茶屋紀の国屋の小春といふ白人に、天満の古い大尽が外の客を追ひ退け、直ぐにその大尽が今日明日に請け出す、とは是沙汰。売買高い世の中でも、金と戯けは沢山な、と色々の評判。こちの親仁五左衛門殿、常々名を聞き抜いて、紀の国屋の小春に天満の大尽とは治兵衛めに極まつた。かゝのためには甥なれど、こちは他人、娘が大事。茶屋者請け出し女房は茶屋へ売りをらう。着類着そげに傷付けられぬ間に取り返してくれうと、沓脱ぎ半分下りられしを、ノウ騒々しい神妙にもなる事を、明さ暗さ聞き届けて上の事と押し宥め、この孫右衛門同道した。孫右衛門の話には『今日は昨日の治兵衛でない。曾根崎の

と、夫婦の詞割符も合ひ、

母「さてはそうか」

と手を打つて、叔母甥心を休めしが、

母「ム、物には念を入れる事。まづく嬉しいとてにも心落着くため、頑固ろの親仁殿、疑ひの念なき様に誓紙書かすが合点か」

治兵「何がさて、千枚でも仕らう」

孫右「いよく満足。即ち道にて求めし」

と孫右衛門懷中より、熊野の牛王の群鳥、比翼の誓紙引き換え、今は天罰起請文、『小春に縁切る思ひ切る、偽り申すに於ては、上は梵天帝釈、下は四大』の文言に、仏揃へ神揃へ、『紙屋治兵衛』名をしつかり、血判を据えて差し出だす。

さん「ア、かゝさん伯父さんのお蔭で私も心落ち着き、子中なしてもつひに見ぬ固め事、皆悦んで下さるせ」

母「オ、尤も尤も、この気になれば固まる。商ひ事も繁昌しよ。一門中が世話焼くも、皆治兵衛為よか

手も切れ、本人間の上々』と、聞けば後からはみ返る、そも如何なる病ひぞや。そなたのてゝ御は叔母が兄、いとしや光譽道清往生の枕を上げ、『賀なり甥なり、治兵衛が事頼む』との一言は忘れねど、そなたの心一つにて、頼まれし甲斐もないはいの」

と、かつぱと伏して恨み泣き、

治兵衛手を打ち、

治兵「ア、読めた、読めた。取沙汰のある小春は小春なれど、請け出す大尽大きに相違。兄貴も御存知、先日暴れて踏まれた身すがらの太兵衛、妻子眷属持たぬ奴、金は在所伊丹から取り寄する。とつくに彼奴めが請け出すを、私に押さへられ、『この度時節到来』と請け出すに極まつた。我れら存知も寄らぬ事」

と言へば

おさんも色を直し、

さん「たとへ私が仏でも、男が茶屋者請け出だすその鼻屑せう筈がない。こればかりはこちの人に微塵も嘘はない。かゝさん、証拠に私が立ちます」

れ、兄弟の孫共可愛さ。孫右衛門おぢや、早う帰つて親仁殿に安堵させたい。世間が冷える、子供に風邪引かしやんな。これも十夜の如来のお蔭、これからなりとも御礼の念仏。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と立ち帰る、心ぞ

直ぐに、仏なる。

門送りさへそこく、敷居も越すや越さぬ内、炬燵に治兵衛またころり、被る蒲団の格子縞。

さん「まだ曾根崎を忘れずか」

と、呆れながら立ち寄つて、蒲団を取つて引き退くれ

ば、

枕に伝ふ涙の滝、身も浮くばかり泣きぬたる。引き起こし引き立て、炬燵の櫓に突き据え、顔つくづくと打ち眺め、

さん「あんまりぢや治兵衛殿。それ程名残り惜しくば、誓紙書かぬがよいはいの。一昨年の十月、中の亥の子に炬燵明けた祝儀とて、マアこれ、こゝで枕並

べてこの方、女房の懷には鬼が棲むか蛇が棲むか。二年といふもの巢守りにして、漸うかゝ様叔父様のお蔭で、睦まじい女夫らしい、寝物語りもせうものと楽しむ間もなく、ほんに酷い連れない。さほど心残らば、泣かしやんせ、泣かしやんせ。その涙が蜷川へ流れて、小春の汲んで飲みやらうぞ。エ、曲もない恨めしや」

と、膝に抱き付き身を投げ伏し、口説き立てゝぞ嘆きける。

治兵衛眼押し拭ひ、

治兵「悲しい涙は目より出で、無念の涙は耳からなりとも出るならば、言はずと心を見すべきに、同じ目より零るゝ涙の色の変はらねば、心の見えぬは尤も、尤も。人の皮着た畜生めが、名残りも糸瓜もなんともない。が、遺恨ある身すがらの太兵衛、金は自由、妻子はなし。請け出す工面しつれども、その時までは小春めが太兵衛が心に従はず。『少しも氣遣ひなされな、たとへこなさんと縁切れ、添はれぬ身になつたりと

思へども、隠し包んでむさゝく殺すその罪も恐ろしく、大事の事を打ち明ける。小春殿に不心中、芥子程もなければ、二人の中を切らせしは、このさんが絡繰り。こなさんがうかくと死ぬる気色も見えし故、余り悲しき。女子は相身互ひ事。切られぬ所を思ひ切り、夫の命を頼む、頼むと掻き口説いた文を感じ、身にも命にも代へぬ大事の殿なれど、引かれぬ義理合ひ、思ひ切るとの返事。わしやこれ守りに身を離さぬ。これ程の賢女がこなさんとの契約違へ、おめく太兵衛に添ふものか。女子は我れ人々向きに、思ひ返しのないもの。死にやるはいの、死にやるはいの。ア、ひよんな事、サ、サ、サどうぞ助けて。助け

て」

と騒げば

夫も敗亡し、

治兵「取り返した起請の内、知らぬ女の文一通、兄貴の手へ渡ししは、お主から往た文な。それなればこの小春、死にやるぞ」

も、太兵衛には請け出されぬ。もし金堰きで親方から遣るならば、物の見事に死んで見しよ」と、モ度々詞を放ちしが、ア、これ見や。退いて十日も立たぬ内、太兵衛めに請け出さるゝ腐り女の四つ足めに、心はゆめく残らねども、太兵衛めが威言こき、治兵衛身代息ついての、ヤ金に詰まつてなんどと、大坂中を触れ廻り問屋中の付き合ひにも、面をまぶられ生き恥かく、胸が裂ける身が燃える。エ、口惜しい、無念な。熱い涙血の涙、ねばい涙を打ち越え、熱鉄の涙が零るゝ」

と、どうど伏して泣きければ、

『ハツ』とおさんが興醒め顔、

さん「ヤア、それならばいとしや小春は、死にやるぞや」

治兵「ハテサテ、なんぼ利発でもさすが町の女房ぢやの。あの不心中者、なんの死なう。灸を据え葉飲んで命の養生するはいの」

さん「いゝや、そうでない。わしが一生言ふまいとは

さん「ア、悲しや。この人を殺しては、女子同士の義理立たぬ。まづこなさん早う往て、どうぞ殺して下さるな」

と夫に縋り、泣き沈む。

治兵「それとてもなんとせん。半金も手付けを打ち、繋ぎ止めて見るばかり。小春が命は新銀七百五十匁飲まさねば、この世に留むる事ならず。が、今の治兵衛が四つ三貫匁の才覚、打ちみしやいでも何処から出る」

さん「ノウ仰山な。それで済まばいと易し」

と、立つて筆筒の小引出し、開けて惜しげも縋ひ交ぜの、紐付き袋押し開き、投げ出だす一包み、

治兵衛取り上げ、

治兵「ヤ金か、しかも新銀四百匁、こりやどうして」

と我が置かぬ金に、目覚むるばかりなり。

さん「その金の出処も後で語れば知れる事。この十七日、岩国の紙の仕切金に才覚はしたれども、それは兄御と談合して商売の尾は見せぬ。小春の方は急な

事、そこに四々の一貫六百匁、マア一貫四百匁」

と、大引出しの錠開けて、

簞笥をひらりと鳶八丈、京縮緬の明日はない、夫の命白茶裏、娘のお末が両面の紅絹の小袖に身を焦がす。

これを曲げては勘太郎が、手も綿もない袖無しの、羽織も交せて郡内の始末して着ぬ浅黄裏、黒羽二重の一張、羅、定紋丸に蔦の葉の、退きも退かれもせぬ中は、内裸でも外錦、男飾りの小袖まで、さらへて物数十五色、『内端に取つて、新銀三百五十匁。よもや貸さぬといふ事はない』物までもある顔に、夫の恥と我が義理を一つに包む風呂敷の、内に情けを込めにする。

さん「私や子供は何着いでも、男は世間が大事。請け出して小春も助け、太兵衛とやらに一分立てゝ、見せて下さんせ」

と言へども

始終差し俯き、しくく泣いてゐたりしが。

治兵「手付け渡して取り止め、請け出してその後、囲うて置るか、内へ入るゝにしてから、そなたはなんと

なる事ぞ」

と言はれて

『ハッ』と行き当たり、

さん「ア、そうぢや。ハテなんとせう。子供の乳母か飯炊きか、隠居なりともしませう」

と、『ワッ』と叫び伏し沈む。

治兵「あまりに冥加恐ろしい。この治兵衛には親の罰天の罰、仏神の罰は当たらずとも、女房の罰一つでも将来はよい筈、許したもれ」

と手を合はせ、口説き嘆けば、

さん「ア、勿体ない、それを拝む事かいの。手足の爪を放しても、皆夫への奉公、紙問屋の仕切金、いつからか着類を質に間を渡し、私が簞笥は皆空き殻。それ惜しいとも思ふにこそ、何言ふても跡偏では返らぬ。サアく早う小袖も着替えて、につこり笑ふて行かしやんせ」

と、下に郡内黒羽二重、縞の羽織に紗綾の帯、金拵えの中脇差、

今宵小春が血に染むとは、仏や知ろし召さるらん。

さん「三五郎こゝへ」

と風呂敷包み、肩に負ほせて供に連れ、金も肌身にしっかりと着け立ち出づる門の口、

五左「治兵衛は内におゐるか」と毛頭巾取つて入るを見れば

『南無三宝、舅五左衛門』

治兵「これはさて、折も折、ようお帰りなされた」

と夫婦は顛倒、狼狽ゆる、

三五郎が負ふたる風呂敷もぎ取つて、どつかりと座り尖り声、

五左「女郎め、下にけつからう。賀殿、ヤこれは珍しい。上下着飾り脇差羽織、あつぱれ良い衆の金遣

ひ、紙屋とは見えぬ。ム、ム、こりやまた新地への御出でかな。ア、御精が出ます。内の女房要らぬもの、おさんに隙遣りや、連れに来た」

と口に針ある苦い顔、

治兵衛はとかうの言句も出でず、

さん「どゝさん、今日は寒いによろ歩かしやんす。ま

ぶお茶一つ」

と茶碗を汐に、立ち寄つて、

さん「主の新地通ひも、最前かゝさん孫右衛門様御出でなされて、段々の御異見。熱い涙を流し、誓紙を書いての発起心。かゝさんに渡されしが、まだ御覧なされぬか」

五左「ム、ム、誓紙とはこの事か」

と懷中より取り出だし、

五左「阿呆狂ひする者の起請誓紙は方々先々、書き出し程書き散らす。合点行かぬと思ひ思ひ来たれば案の如く、コ、コ、この様でも梵天帝釈か。この手間で去り状書け」

と、ずんぐりに引き裂いて投げ捨てたり、

夫婦は『アッ』と顔見合はせ、呆れて詞もなかりしが。

治兵衛手を突き頭を下げ、

治兵「御立腹の段、尤もとも御詫び申すは以前の事。

今日の只今より何事も慈悲と思ひ召し、おさんに添は

せて下されかし。例へば治兵衛、乞食非人の身となり、諸人の箸の余りにて身命は繋ぐとも、おさんはきつと上に据え、憂い目見せず辛い目させず、添はねばならぬ大恩あり。その訳は月日も経ち私の勤め方身上持ち直し、御目に掛くれば知るゝ事。それまでは目を塞いで、おさんに添はせて給はれ」

と、はらく零す血の涙、畳に喰ひ付き詫びければ。

五左 「非人の女房にはなほならぬ。去り状書け、去り状書け。おさんが持参の道具衣類、数改めて封付けん」

と立ち寄れば

女房慌て、

さん 「着る物の数は揃ふてある。改むるに及ばぬ」

と、駆け塞がれば

突き退け、ぐつと引き出し、

五左 「ヤ、こりやどうちや」

また引き出してもちんからり、有り丈こたけ引き出しても、継ぎ布一尺あらばこそ、

葛籠、長持、衣裳櫃、

五左 「これ程空になつたか」

と舅は怒りの目玉も据はり、

夫婦が心は今さらに、明けて悔しき浦島の、炬燵蒲団に身を寄せて、火にも入りたき風情なり。

五左 「この風呂敷も氣遣ひ」

と、引き解き取り散らし、

五左 「さればこそく。これも質屋へ飛ばすのか。ヤ

イ治兵衛、女房子供の身の皮剥ぎ、その金でお山狂ひ。生けどう掏摸め。女房共は叔母甥なれど、この五左衛門とは赤の他人。損をせう誼みがない。孫右衛門に断り、兄が方から取り返す。サア去り状、去り状」と、七重の扉八重の鎖、百重の囲みは逃るゝとも、逃れ難がたき手詰めの段、

治兵 「オ、治兵衛が去り状筆では書かぬ。これ御覽

ぜ、おさん、さらば」

と脇差に手を掛くる

縋り付いて、

と慕ひ嘆けば

さん 「オ、愛しや。生まれて一夜もかゝが肌を離さぬもの。晩からはとゝさんと寝ねしや、や。二人の子供が朝普茶前忘れず、必ず桑山飲ませて下され。ノウ

悲しや」

と、夫に抱き付き声を上げ、泣き叫ぶこそ道理なれ。

五左 「ア、よいく去り状要らぬ。女郎め、来い」と引つ立つる、

さん 「イヤ、わしや往かぬ。飽きも飽かれもせぬ中を何の恨みに昼日中、女夫の恥は曝さぬ」

と、泣き詫ぶれども

聞き入れず、

五左 「この上に何の恥、町内一杯喚いて行く」

と、引つ立つれば

振り放し、小腕取られよろゝと、よろめく足の爪先に、

可愛やはたと行き当たる、二人の子供が目を覺まし、

勘太 「大事のかゝ様なぜ連れて行く。祖父様め、今から誰と寝ようぞ」

恋情け、こゝを瀬にせん蜷川、流るゝ水も行き通ふ、

人も音せぬ、丑三つの空十五夜の、月冴えて。

光は暗き門行灯、『大和屋伝兵衛』を一字書き、

眠りがちなる拍子木に、番太が足取り千鳥足、

番太 「御用ざ、御用ざ」

と声更けたり

下女 「駕籠の衆、いかう更けたの」

と上の町から下女子、

迎ひの駕籠も大和屋の、潜りぐはらくつゝと入り、

下女 「紀の国屋の小春さん借りやんしよ、迎ひ」

とばかりほの聞こえ、後は三つ四つ挨拶の、程なく潜りによつと出で、

下女 「小春さんはお泊まりぢや、駕籠の衆、直ぐに休ましやれ。ア、言ひ残した。コレ花車さん、小春さんに気を付けて下さんせ。太兵衛さんへの身請けが済んで金受け取つたりや預かり物。酒過ごさせて下さんすな」

と、門の口から明日待ため、治兵衛小春が土になる、種蒔き散らして帰りける。

茶屋の茶釜も夜一時、休むは八つと七つとの、間にちらつく短檠の光も細く更くる夜の、川風寒く霜満てり。

亭主 「まだ夜が深い、送らせましょ。治兵衛さんのお帰りぢや。小春さん起こしませ、それ呼びませ」

は亭主が声、

治兵衛潜りをぐはさと開け、

治兵 「ア、これく伝兵衛、小春に沙汰無し耳へ入れ

治兵 「これさへあれば、千人力。もう休みやれ」

と立ち帰る

伝兵 「追つ付けお下りなされませ。ようござりま」

もそこく、後は樞をこつとりと、物音もなく静ま

れり。

治兵衛はつゝと往ぬる顔、また引つ返す忍び足、大和屋の戸に縋り、内を覗いて見る内に、

間近き人影びつくりして、向ひの家の物陰に過ぐる間暫し、身を忍ぶ。

弟故に気を碎く、粉屋孫右衛門は先に立ち、

後に丁稚の三五郎が、背中に甥の勘太郎連れ、行灯目当てに駆け来たり、大和屋の戸を打ち叩き、

孫右 「ア、ちと物問ひませう。紙屋治兵衛はあませぬか、ちよつと逢はせて下され」

と呼ばはれば

治兵 「さては兄貴」

と治兵衛は身動きもせず、なほ忍ぶ。

内から男の寝惚れ声、

ば夜明けまで括られる。それ故よう寝させて抜けて去ぬる。日が出てから起こして去なしや。われら、今から帰ると直ぐに、買ひ物のため京へ上る。大分の用なれば、中払ひの間に合ふ様に帰るは不定。最前の金でそなたの算用合ひも仕舞ひ、河庄が所へも後の月見の払ひといふて、四つ百五十匁受け取り取つてたもうしと、福島ふくまの西悦坊が仏壇買ふた奉賀。銀一枚回向しやれ、と遣つてたも。その外に係り合ひは、ア、それよく、磯市が花銀五つ。こればかりぢや、仕舞うて寝やれ、さらばく戻つて逢はう」と、二足三足行くより早く立ち帰り、

治兵 「脇差忘れた、ちやつとく。なんと伝兵衛、町人はこゝが心易い。侍なればその儘切腹するであらうの」

亭主 「や、我れ等預かつて置いてとんと失念。サ小刀も揃ふた」

と渡せば

取つてしつかと差し、

男 「治兵衛さんはまちつと先に、京へ上るとしてお帰りなされた。こゝにではござらぬ」

と、重ねて何の音なひも

涙はらく孫右衛門、

孫右 「帰らば道で逢ひそなもの。京へとは合点が行かぬ。ハア氣遣ひで身が震ふ。小春を連れては行かぬか」

と胸にぎつくり横たはる

心苦しさ堪へ兼ね、また戸を叩けば、

男 「夜更けて誰ぢや。もう寝ました」

孫右 「御無心ながら、ま一度お尋ね申したい。紀の国屋の小春殿はお帰りにされたか。もし治兵衛と連れ立つて行きはなされぬか。ヤ、ヤなんぢや。小春殿は二階に寝てぢや。ア、まづ心が落ち着いた。心中の念はない。何処に屈んでこの苦を掛ける、一門一家親兄弟が、固唾を吞んで臟腑を揉む、とはよも知るまい。舅の怨みに我が身を忘れ、無分別も出ようかと、異見の種に勘太郎を連れて尋ぬる甲斐もなく、今まで逢は

ぬは何事」

と、おろ／＼涙の独り言。

隠るゝ間の隔てねば、聞こえて治兵衛も息を詰め、涙飲み込むばかりなり。

孫右「ヤイ三五郎、阿呆めが夜々失せるところ、外には知らぬか」

と言へば

阿呆は我が名ぞと心得て、

三五「アイ、知つてゐれど、こゝでは恥かしくて言はれぬ」

孫右「知つてゐるとは、サア何処ぢや、言ふて聞かせ」

三五「エ、聞いた後で叱らしやんな。毎晩ちよこ／＼行く所は、市の側の納屋の下」

孫右「大だはけめ。それを誰が吟味する。サア来い、裏町を尋ねて見ん。勘太郎に風邪引かすな。アゝこくにも立たぬとゝめを持つて、可愛や冷たい目をするな。この冷たさで仕舞へばよいが、ひよつと憂い目は

見せまいか。憎や憎や」

の底心は、不憫々々の裏町を、『いざ尋ねん』と行き過ぎる。

影隔たれば駆け出で、後懐かしげに伸び上がり、心に物を言はせては、

治兵「十悪人のこの治兵衛、死に次第とも捨て置かれず、後から後まで御厄介、勿体なや」

と手を合はせ、伏し拝み伏し拝み、

治兵「なほこの上のお慈悲には、子供が事を」と、ばかりにて、暫し涙に噎びしが。

治兵「とても覚悟を極めし上、小春や待たん」と大和屋の、潜りの隙間差し覗けば、

内にちらつく人影は

治兵「小春ぢやないか」

小春「待つて」

と知らせの合図の咳、

小春「エヘン、エヘン」

かつち／＼、

『エヘン』に拍子木打ち交せて、

上の町から、番太郎がくる／＼手繰る風の夜は、せき／＼廻る

番太「火の用心、御用ぎ、御用ぎ、御用ぎ」

も人忍ぶ、

我れには辛き葛城の、神隠れしてやり過し、隙を窺ひ、立ち寄れば、潜り内からそつと開く、

治兵「小春か」

小春「待つてか治兵衛さん、早う出たい」

と気を急げば、

急ぐ程廻る車戸の

治兵「開くるを人や聞き付けん」

と、しやくつて開くればしやくつて響き、耳に轟く胸の内、

治兵衛が外から手を添えても

心震ひに手先も震ひ、

三分四分五分、一寸の先の地獄の苦しみより、

鬼の見ぬ間と漸うに、明けて嬉しき年の朝

小春は、内を抜け出で、

互ひに手に手を取り交はし

二人「北へ行かうか、南へか。西か、東か」

行く末も、心の早瀬蜷川、流るゝ月に逆らひて、足をはかりに

道行名残りの橋づくし

走り書き。

謡の本は近衛流、野郎帽子は若紫、悪所狂ひの身の果ては、かくなり行くと定まりし。

釈迦の教えもある事か、元はと問へば分別の、あのいたけな貝殻に一杯もなき蜆橋、短きものは我々がこの世の住居、秋の日よ、

治兵「十九と二十八年の今日の今宵を限りにて、丸三年も馴染まいで、この災難に大江橋、あれ見や難波小橋から舟入橋の浜伝ひに、これまで来れば来る程は、冥途の道が近づく」

と、嘆けば

女も縋り寄り、

小春「もうこの道が、冥途か」

と、見交はす顔も見えぬ程、落つる涙に堀川の、橋も水にや浸るらん。

一人の蔑み、恨み妬みもさぞと思ひ遣り、未来の迷ひはこれ一つ」

と、口説けば

共に、口説き泣き。

後ろに響く大長寺の鐘の声、『南無三宝、長き夜も夫婦が命短夜』と、早や明け渡る晨朝に、『最期は今ぞ』と引き寄せて、後まで残る死に顔に、『泣き顔残すな』

『残さじ』と、気を取り直し、一刃、

抉る苦しき暁の、見果てぬ、夢と

(2025. 6. 8)

北へ歩めば、我が宿を一目に見るも見返らず、子供の行方女房の、哀れも胸に押し包み、南へ渡る橋柱は、数も限らぬ家々を、如何に名付けて八軒屋、誰と伏見の下り船、『着かぬ内に』と道急ぐ、この世を捨て、行く身には、聞くも恐ろし天満橋、

小春「この世でこそは添はずとも、未来は言ふに及ばず。今度の今度のずつと今度のその先までも女夫ぞや。あれ寺々の鐘の声、最期を急がんこなたへ」

と、手に百人の玉の緒も、涙の玉に繰り交せて、南無綱島の大長寺、藪の外面のいさゝ川、流れ漲る樋の上を、最期所と着きにける。

小春「死に場はいづくも同じ事、とは言ひながら。わしが道々思ふにも、二人が死に顔並べて、『小春と紙屋治兵衛の心中』と沙汰あらば、おさんさんより頼みにて、『殺してくれるな』『ア、殺すまい。挨拶切る』と取り交はせし、その文を反古にし、大事の男を唆しての心中は、さすが一座流れの勤めの者。義理知らず偽り者と世の人千人万人より、おさんさん